



幕末の若きサムライたち

新潟大学大学院医歯学総合研究科 血液・内分泌・代謝内科学分野
客員研究員 渡辺 賢一

はじめに

1860年頃に福沢諭吉など幕末の若き獅子達が高い志を持ってヨーロッパへ旅立ってから160年経過しました。幕末の動乱期ですので幕府の要人たちのほとんどは「遣欧使節団は捨て駒」と考えていましたが、それを知っていても好奇心・未来への希望に燃える「若き獅子達」がその後の近代日本を作っていく事になりました。私も50年前から、学会・JICA・留学などで約60の諸外国を訪れましたが、50年・160年の時空差を体験するためにもう一度訪れたいとの思いからエジプトに行ってきました。

1) モハメド・アリ・モスク (図一右上 160年前、図一右中 2025年)

ムハンマド・アリー・パシャにより1848年ころ建設されたモスクで、城塞南西の一角にあります。トルコのアヤソフィアに似たオスマントルコ様式のモスクであり、エジプトで最も高い2基の尖塔(ミナレット)を備えるカイロのランドマークであります。いつの世でも信仰・宗教の力は強大で、160年経ってもほとんど変わりません。

2) スフィンクス(図一左上 160年前、左下 2025年)

図一左上は160年前のスフィンクスと戯れる日本の侍たちです。50年前にはスフィンクスに登ることは禁止でしたが触ったりすることは可能でした。今回は柵外から眺めるだけになっていました。同様に、世界遺産のイギリス・ストーンヘンジ等も50年前に触ってきましたが現在は遠くから眺めるだけになっているところがほとんどです。ギザの大スフィンクスは全長73m高さ20mもあり、一枚岩で造られた彫刻の中では世界最大の大きさを

誇ります。しかし、頭部は他の場所で掘られた後に胴体と組み合わせたことがわかつていて、4500年前頃に栄えた古代エジプト第4王朝のカフラー王が造ったといわれています。現在は顔から足元まですべて露出していますが、紀元前14世紀のエジプト第18王朝トトメス4世の時代には既に砂に埋っていたとされています。後に修復が繰り返されました。1798年にナポレオン・1864年に日本の侍が訪れた時も砂に埋もれていました。

3) 幕末の若きサムライ達・遣欧使節団 (図一右下)

鎖国をしていた日本でも（特に幕末の知識人たちは）大変な国際的感覚と知識を持っていて、世界のガイドブック『地球説略』を持っていました。その本にもピラミッドの情報は掲載されていて現代語訳をすると、「カイロの近くに古跡があつて、家とも塔ともいえない塚のように石を積み上げたものがある。その頂上の高さは山にも匹敵する。塚の中には古人の棺がある。どれくらい前の時代までさかのぼるのか分からぬ。」と述べています。スフィンクスについても当時の侍たちは、「巨大首塚」の存在を知っていました。1861(文久元)年12月24日横浜発の第1回遣欧使節（文久遣欧使節）団員が、スエズからエジプトに入り陸路でカイロを経由し地中海に面したアレクサンドリアへの旅を記録しています。エジプトの土地に日本人が踏み入れた史上初の出来事です。しかし、この第1回遣欧使節団はカイロに2泊しかしていません。団員の福沢諭吉はピラミッド・スフィンクスを見たと言っていますが写真などの証拠はありませんし、時間的な余裕もありませんでした。第1回遣欧使節団の旅のルートは、横浜から長崎・香港・シンガポール・セイロン(スリランカ)・アラ



ビア半島南端のイエメンを経てエジプトのスエズに入っていますが、スエズ運河の完成は1869年です。日本からカイロへは数か月かかりましたが、今では飛行機直行便があり10時間で到着します。いまの感覚でいえば、このときの一団はエジプトで「トランジット」をしただけです。その意味で真のエジプト探訪は、2年後の第2回遣欧使節団によって実現します。1863（文久3）年12月に第2回遣欧使節団が再び横浜港からヨーロッパに送り込まれます。当時の日本は、尊王攘夷・倒幕の機運が盛り上がっている幕末の動乱期です。弱腰の朝廷が国内世論を押さえきれずに、一度は認めた開港を取りやめるための交渉を幕府に求めました。無理難題を押し付けられた幕府が時間稼ぎの意味も込めて、遣欧使節団をヨーロッパに送り込みました。遣欧使節団総勢35名の正使は27歳の若き外国奉行池田長發（ながおき）筑後守で、メンバーの大半は30代と20代であり最年少は15歳です。つまり、幕府は達成不可能な任務を持った「捨て駒の若者集団」をヨーロッパへ差し向けました。そのご褒美として第1回遣欧使節団が2日しかカイロに滞在しなかったのに比べ、第2回遣欧使節

団はカイロに11日間もの滞在を許可します。その際、郊外のピラミッドを見物する予定が組まれました。カイロからギザの三大ピラミッドまでの所要時間は現代では車で約1時間の距離ですが、当時の移動手段は馬車を使い更にナイル川岸はロバに乗り換える大旅行でした。旅行の参加者27名を移送するために、10台の馬車が用意されます。当然、日本から来た侍たちはカイロの人たちにとって、宇宙人を見るような好奇の対象です。ピラミッドに向かう一行にエジプト人群衆が押し寄せたとの記録が残っています。スフィンクス前に立つと、27名の若きサムライ達が感じたであろうこれからのパリ・未来への高揚が聞こえてくるようでした。

終わりに

160年で日本は徳川の侍社会から令和に変遷しましたが、世界の一部は4500年前から不变ともいえます。若き遣欧使節団は「捨て駒」ではなく「未来の日本を託す宝石」と、幕末の要人が考えていたと思っています。古今東西、若者が他国を旅するのにはよいことで、これからも諸外国を旅して何かを感じてもらいたいです。